パラスポーツ、健常者も一緒に　東京パラリンピック1年

#東京 #Tokyoオリパラ #関東

2022/8/23 2:00 [有料会員限定]

車いすバスケットボールの体験では競技用車いすに乗りながら走ったり、ボールを投げたりした（20日、東京都世田谷区）

東京パラリンピック開幕から24日で1年。大会をきっかけに、パラスポーツへの関心が大きく高まり、障害者はもちろん、健常者も一緒に、様々なパラスポーツを楽しむ姿が見られるようになった。

東京オリパラの公式練習会場となった「駒沢オリンピック公園」（東京・世田谷）で20日、車いすバスケットボールや車いすフェンシング、ボッチャなど約20のパラスポーツを体験できるイベントが開かれた。

東京都内の小学3年生、谷本優翔君（9）は車いすバスケを体験し、大人たちや健常者らとコート内を走り回り汗をかいた。「普段使っている車いすと比べ競技用は車輪が軽くて速い。もっと色々なスポーツに挑戦してみたい」と笑顔で話した。

車いすフェンシングの得点の入り方を説明する加納慎太郎選手㊧（20日、東京都世田谷区）

車いすフェンシングのコーナーには、東京パラに出場した加納慎太郎選手が登場した。剣の構え方や得点の入り方を説明し、俊敏な剣さばきを見せると、感嘆の声が上がった。日本パラフェンシング協会の牛込公一代表理事は「競技体験を通じて未来の選手発掘につなげたい」と話す。

東京都はパラ選手の発掘にこれまでも力を入れてきた。競技団体と参加者をマッチングする「パラスポーツ次世代選手発掘プログラム」を東京都障害者スポーツ協会と2015年度から共催している。

東京パラの出場選手で同プログラム出身者は4人。16年度に参加したボートの有安諒平選手はもともと視覚障害者柔道に取り組んでいたが、「東京パラリンピックに出場したいと強く思い、もっと自分の特性に合った競技に転向しようと参加し、大会出場の夢を果たせた」という。

「視覚障害があるためスポーツをすることに尻込みしていたが、柔道を始めてみると、壁をつくっていたのは自分だと気づいた」と有安さん。「一歩飛び込む勇気が必要だが、あとは楽しさが広がっていた」とかつての自分を振り返った。

同プログラムの22年度の測定会・競技体験会は9月23日と11月26日に予定している。

「東京都パラスポーツトレーニングセンター」は味の素スタジアム内に開設される（東京都調布市）

パラスポーツの普及には施設の整備も重要だ。都は23年3月に、調布市の味の素スタジアム内に「東京都パラスポーツトレーニングセンター」を開業する。

車いすフェンシング用の車いすを固定する装置やパラパワーリフティング用のベンチセットなど、パラスポーツに必要な用具などを整備する。障害の有無にかかわらずパラスポーツの競技力向上を目的とする団体は優先予約できるようにするという。

ワントゥーテンが開発した「サイバーボッチャS」は投げたボールと白いジャックボール（目標球）の近さを自動計測する

イベントでは画像解析して勝敗を判定する「サイバーボッチャS」などの出展もあった。開発したワントゥーテン（京都市）の担当者は「ボッチャは頭脳戦で魅力ある競技。多くの人に触れてもらえればと、エンターテインメント性を高めた」という。

都パラスポーツ担当者は「東京パラリンピックで高まった機運を一過性で終わらせないよう、パラスポーツ振興を継続していく。アスリートへの支援策に偏らず、様々な障害のある人がスポーツに参加できるよう支援していく」と話している。

早稲田大学スポーツ科学学術院の間野義之教授（スポーツ政策）は「健常者向けのパラスポーツ体験会などは相互理解のための重要なコミュニケーションの機会になる。世界で唯一パラリンピックを2回開催した都市として、パラスポーツ振興や障害者のスポーツ参加に注力することは重要だ」と話している。（鈴木菜月）